

昆虫の天気予報

昔の人の話には昆虫や動物と天気の話が良く出てきます。また、「夕焼けは晴れ」、「月が笠をかぶると雨」といったものは今日でも良く知られていますね。

「アリが巣の出入り口を塞いでいると大雨が降る」と昔からよくいわれていますが、これは本当の話です。アリは触覚や体に生えている細かい毛で、低気圧や空気中の湿度が下がるのを感じ取ります。感覚子と呼ばれる小さな毛には、味・温度・音などを感じとる器官があります。

また、短い予報では、「ハルゼミが鳴いたら晴れる」というのもよくききます。5月ごろに鳴くハルゼミは雨の日には鳴かず、雨が小降りになってきて鳴き始めると、まもなく晴れてきます。これは、ハルゼミが明るさや気温の変化に敏感なためです。ハルゼミの鳴き声を聞いた人は多いと思いますが、直接見たことのある人は少ないようです。鯉のぼりの季節と共に現れるこのセミはマツ林にしか棲息していないので、鳴き声が聞こえたら一度注意して探してみましょう。

季節の変わり目などでは、「セミが鳴くと梅雨が明ける」というのがあります。5月頃のハルゼミから、7月入ってのニイニイゼミ、アブラゼミ、ミンミンゼミ、クマゼミ、ヒグラシ、ツクツクボウシと続きますが、梅雨明けに関係するのは、ニイニイゼミやヒグラシです。

子供の頃、セミが鳴き始めると「もう直ぐ夏休みだなあ」、「いよいよ本格的に暑くなるなあ」と期待に大きく胸がふくらんだものです。でも、セミは何故梅雨明けの時期に鳴き始めるのでしょうか。

実は、土の中のセミの幼虫は春からの土の温度を感じ取っているのだそうです。つまり、

- ・土の中の温度が高いと成長が早くなり、
 - ・逆に土の中の温度が低いと幼虫の成長も遅くなる
- そうです。

つまり、梅雨と日差しの関係で

- ・梅雨が長く続くと、日差しが少ないため地中の温度も低く、幼虫も育たず、幼虫が地上に出てくるのも遅くなります。
- ・一方、梅雨が短いと、日差しも強くなり地中の温度も高くなり、幼虫が早く育って地上に出てくるのも早くなる。

というわけです。

北陸などでは、その年の雪の量は大きな関心事です。カマキリの卵のうがその年の雪の量を予知してくれるという面白い話があります。すなわち、積雪量が多い年には卵のうの位置は雪の中に埋らないように高い位置にあり、積雪量が少ない年には低い位置にあるというのです。私も、雪国に住んでいる関係で注意して観察していますが、最近は大雪に見舞われることもなく、その相関関係は不明のままです。

蝶などは、雨が降ってくると慌てて木陰に逃げ込む場面に出くわしますが、ウラキシジミなどは少々の雨であれば、気にもとめないで飛んでいます。

天気に関する昔からの諺はそれなりの理由があります。外れは20～30%ぐらいですが、蝶の撮影の時に参考になることもあるでしょう。どんなことでも一応理由を考えしておく習慣をつけましょう。いくつか挙げてみます。

「山が笠をかぶると雨」

理由：山腹に沿って、上昇気流がおこって雲が出来ているとそうなります。これは、低気圧や前線が近づいているとき起こりやすい。

「太陽が笠をかぶると雨」

理由：上空にうす雲があり、温暖前線が近づいています。天気がくづれる前兆です。

「ツバメが低く飛ぶと雨」

理由：ツバメは餌として虫を追っています。昆虫は湿度が上がると、低いところを飛ぶようになります。

「雨蛙は雨」

理由：雨蛙は皮膚呼吸をしています。湿度が高くなると、高い風通しの良いところに出てきます。

「遠くの音が良く聞こえるときは下り坂」

理由：湿度が高くなると、音は伝わりやすくなります。鉄道の音や鐘の音が良く聞こえる時は下り坂。